The Zoological Society of Japan

動物學雜誌 第二百四十四號
明治四十二年二月十五日發行

●*Plerocercoides prolifer* Ijima に就て

吉田貞雄

(明治四十二年一月十日受領)

Plerocercoides prolifer なる條蟲は飯島博士が去る明治三十七年七月初めて東京醫科大學附屬病院の一婦人患者より得られ此を翌三十八年(千九百〇五年)刊行の理科大學紀要第二十卷第七編に於て記載發表せられしものにして爾後此を發見するものなかりしが余は明治四十年十二月十三日飯島博士に從ひ同醫科大學病理解剖室にて解剖に附せられし一患者より無數の該條蟲を得たれば其大要を記し併せて第一回に報告せられしものと異なる點を述ぶべし。

患者

患者は固より該條蟲寄生の爲めに死去したるものにして柴崎文海と言ひ行年三十六歳の一僧侶なり同人が醫科大學に入院せし以前の生活につきては詳細に知る事を得ざれども晩年は東京附近に住居せしものにして或時は池上本門寺に住し或時は淺草の某寺に住せし事ありしと言ふ其親族にて麻布區に住するもの及其の兄弟にて小石川區白山前町大乘寺に住するものにつき此の疾病及其の起原等につき尋ねたれども別に記載する程の事實を得ず只本人が病院に於て醫員に語りし處を以て見るに患者自身も亦此の難病の源因につきては一も知る處なく只五六年前患者は一種の病氣に犯されしが初めは黴毒性のものなりと自からも信ぜしと言ふ續て去る明治三十九年(前殆んど一年)中偶然患者が頸部を搔きし際搔傷より白色の物を押し出したりと然れども尚其の何物なるやを知らざりき翌四十年に至り病氣漸く重態に陷り遂に精神に異狀を來すに至りしを以て、同年十一月十三日帝國大學醫科大學附屬病院に入院したるものなるが當時身體痩瘠全身蒼白にして正しく貧血の症狀を呈せり。

入院後飯島博士は脛部後側を切開し若干の該條蟲を得られたり十二月十一日余が患者を見し時は身體諸部に米粒大、小豆大或は蠕蟲狀にウネリたる「膨ラミ」あり正し

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

く其の條蟲の存在を示せり而して常に注意せし醫員の話によれば此の「膨ラミ」は時々移動す是れ蟲體の皮下にて移行するを示すものなり余は患者の全身到る處に此等「膨ラミ」を見しも殊に腹部胸部に多く見たり。

症狀

患者の病理的症狀につきては門外漢なるを以て一も記する事能はず然れども第一回に飯島博士の記載せられしものと稍々異なる處あれば此を記せんに該患者は毫も瘙痒の感を起す事なかりし此れ該寄生蟲の爲めに神經系を犯され精神作用に異狀を來せしによりて然るか將た全然此の感なきによるかを判別すると能はず先年發見せられし該條蟲の患者は頻りに痒感を起し爪を以て搔き皮下より白色の蟲體を押し出せしと又此度の患者は前記の如く身體痩せ細り全身到る處に條蟲の存在するを示せしが先年の患者にありては該蟲に犯されし皮膚は肥厚し殊に左股內側の如きは其の厚さ一寸位に達したりと其他二者に於て多少の相違あれども是れ根本的の相違にあらず病氣の進程各個人の體質等によりて起りし相違なりと謂ふべし

二

蓋し前回の患者は全快せざるに先ち退院し其後如何なりしや知られざれば其病症の變化も知るに由なきも恐らくば該蟲全身に蔓延し遂に死せしならんと思はる要するに此度の患者の病勢は前回のに比し遙かに進行せしものなる事は死體解剖及該寄生蟲の成長の程度により推知する事難からず。

寄生蟲の數量

生前外部より見るも其の寄生蟲の數甚だ少からざるを知りしが死體の解剖を見るに至り其の數量の大なるに孰も驚かざるものなかりし或る人曰く「斯の如く多くの蟲に寄生せられては蟲を殺すより人間を殺す方早し」と言稍々無慈悲に似たれども此の解剖を實見せしものは誰れも其の蟲の爲めに患者の死するも無理ならぬ事なりとの感を起さざるものなかりしなり、該蟲の存在する處は啻に皮膚筋肉結締組織內のみならず內臟諸器管中心臟の腔內を除くの外殆んど犯されざる處なきに至れり、脊髓中には該蟲を發見せざりしが腦室中には少數の蟲體を見たり然れども此の腦中に發見せられしものは執刀者の不注

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

意の爲め指頭、ナイフ等に附着せしものなりやも知れず、眼球内にも發見せられざりき。

斯の如く身體の各部を犯せし該蟲の數は決して鮮少にあらず各器官、各組織中に密に存在するものにして如何なる方向に小刀を入るゝも蟲體を害せずして小刀を動かすと能はざる程なれば一刀を切り入るれば切り口よりは無數の蟲體押し出さるゝを見るなり、第二圖は患者の背部より切り取りし筋肉の一片にして所々に見ゆる「膨ラミ」Cは蟲囊にしてwは切口より押し出されたる蟲體なり、該蟲の數は患者身體の各部により多少の相違ありと雖も余は腰背部の筋肉片一寸平方内にて二十個乃至二十五個の蟲囊を算出したり飯島博士は前回の患者に於て十一平方センチに六十個の蟲囊を計算せられたり、此等寄生蟲は多く被囊中に包まれたれども時としては自由に人體組織内を移動するものあり。

蟲囊

蟲囊は前述の如く患者身體の到る處に存在し（第一圖及第三圖）其形、球形、楕圓形、卵形若くば不整形にして患者身體の部位に應じ蟲囊に大小の區別あるを見ず其大さも亦大小不同なり小は一ミリ直徑より大は十六ミリ以上の直徑を有するに至る或は長さ十ミリ巾六ミリ楕圓形なるあり或は十二ミリ直徑の不整形なるあり平均三乃至六ミリ直徑のもの最も多數なり、（第一圖第三圖）蟲囊は各々一個づゝ離れ散在する事あり或は數個連結することあり、何れにしても各個は容易に取り離し得るものなり此被囊中には一個の蟲存在することあり或は二個以上の蟲を見ることあり第五圖は被囊の切斷面にて其内にある蟲體の斷面をも示せるものなり被囊の壁は同圖に示すが如く可なり厚き纖維狀の組織を有し其色淡黃白色なり、囊壁を傷け輕く壓する時は白色の蟲體は裂口より押し出さる、是れ死體解剖の際執刀者刀を動せば切口より蟲體の押し出さるゝ所以にして完全なる蟲體を得んには被囊の一部に孔を設け靜かに蟲體を引き出すか若しくは被囊を丁寧に切り開くにあれども後の方法は事甚だ面倒に屬するを以て前法を執ると遙かに便なり蓋し過つて蟲體を害することあるも材料の豐富なるが爲め完全なるものを

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

得ると容易なればなり。

蟲體及蟲嚢の標本

上記の法によりて得たる蟲體を固定するに當り初め普通溫度（室內溫度）の昇汞或は七十パーセントのアルコールを用ひしが蟲體收縮して原形を失ひしが故に固定法としては甚だ不完全なるを知れり左れば余は飯島博士の指導に從ひ被嚢中より得たる蟲體を豫め少しく溫めたる食鹽水中に入れしに蟲は自由に運動し身體を伸ばせしを以て其の時を見計り昇汞液の熱湯を注加し茲に初めて可なりよく伸長したる標本を得たり第一圖第三圖內の長きものは斯の如くして得たるものなり。

蟲嚢は昇汞液或はアルコールにて固定したり人體組織の大なる筋肉片及脂肪片は五パーセントのフォルマリン液中にて固定し小片はミューレル氏液にて固定したり。

蟲の形狀及大さ

第一圖第二圖に示すが如く該蟲の大さ及形狀には種々ありて一定せず茲に注意すべき一事は此回得たる該條蟲の大さは著しく前回に得られしものより大なる事にして

余が得し標本中最大なるものは長さ七十五ミリ巾二ミリ（第一圖）他は長さ三十三ミリ巾二ミリ又は長さ二十五ミリ巾二ミリ等にて長さと巾とは蟲の收縮せる狀態により相違ある事明なり小なるは二三ミリに過ぎざる者あり。

該條蟲の形狀につき最も注意すべきは出芽即ち分枝する事にして其枝の大小、數の如きは蟲の成長と相伴ふもの〻如し被嚢內に於ける該蟲の分枝、出芽の方法成長等につきては前回の報告に於て飯島博士の詳しき所說あれば茲に贅せず只前回に見ざりし異形のもの二三につき見るに分枝せし枝の成長著しく遂に何れか本來の幹部なりしか見別け難きに至るあり（第三圖）出芽する部分にも一定の規則なく任意の個所より分枝するが如く又蟲の大小により分枝すると否との相違ありとも思はれず余が得し標本中大なるものにして分枝せざるものあり小形のものにして分枝せるものあるが如きにより知らるべし。

該蟲の兩端は何れが前方にして何れが後方なるか識別し難き事多し然れども前端と思はるゝ方は多少凹陷し一時的の吸着作用をなすが如き形をなす事あれども他の條

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

蟲に見るが如き眞の吸器とも言ふべきものあるを見ず。

內部の構造

內部の構造も亦大體に於て先年飯島博士の記載せられしものと異なる處なきが故に玆に詳述するを止め其概略を記せんのみ。

上皮は概して薄く僅かに〇・〇〇五ミリに過ぎざるも時としては此より少しく厚き所あり、上皮の下には二層の微弱なる皮膚筋層あり外層は輪筋にして內層は縱筋なり。

此の條蟲に最も注意すべきは飯島博士の所謂營養物質體(Nutritive matters)の存在にして其の形は球形なることあり時としては長き管狀をなすことあり而して其數形狀蟲體內に於ける位置及數に至りては不定なるが如し飯島博士の所說に從へば該營養物質體は若き蟲體及び新しく分枝したる部分には少く蟲體の老成するに從ひ其の形增大し其の數增加するものなるべしと營養物質體を含む腔所の壁は構造全く蟲體の皮層と同一(但し順序反對)なり而して余が多くの薄片標本中該腔所は皮膚の凹入して生じたるにはあらずやと思はしむるものあれども其果して然るや否や尙疑問の中に在り。

石灰質物體筋肉層排泄器神經系及其他の構造は別に記載すべき事なし。

以上は *Pleurocercoides prolifer* につき余が實驗せし概略なるが該條蟲は前にも記せし如く飯島博士が初めて記載せられ前記の學名を附せられしが爾來外國には勿論我國にも發見せられし事なき爲め餘り廣く知られざりしを以て去る千九百〇六年 W. Stiles 氏は其著書中に於て此を *Sparganum* 屬に入れしが此れ固より深き理由あり詳細なる研究を經て此屬に移したるにあらず只分類上不明なるもの〻集まり處とも言ふべき此 *Sparganum* 中に入れしは全く分類上の簡便を主としてのみ、左れば此れを *Sparganum* 屬とすべき理由一もなく依然として *Pleurocercoides prolifer* Ijima 1905 とすべきこと勿論なり。

終りに該條蟲は尙幼蟲なれば其の成體は如何なるものなるか又何動物に寄生するものなるか固より知るに由なし、即ち此條蟲の生活史につきては少しも知ることを得

NII-Electronic Library Service

The Zoological Society of Japan

ず。

又人體に入り來るは其生活史上正當の道なるか將た誤つて人體に入り來りたるかも不明なり最も普通の(嚴密には言ひ難きも)條蟲生活史に照す時は幼蟲の寄生する動物即ち中間宿主は最終宿主の餌となるもの一般なるが如し若し此より推測する時は該條蟲の成體は人間の肉を食とする動物に寄生するか或は人體にありて幼蟲より漸々成體となるか若くは他の動物に寄生すべかりしものが誤つて人體に入り來りしか其何れなるか不明なり、左れば此幼蟲を以て動物試驗をなすは最も吾人に取り興味多き事業なるが前回に於て猿に移殖せしも見るべき結果を得ず今回亦醫科大學に於て該幼蟲を猿の皮下に移植せしに後若干もなくして猿は他の原因により斃死せしが故に此を解體せしに其體内に該幼體を發見したりと雖不幸猿の落命早かりし爲め望みの結果を得ざりしは最も遺憾とする處なり。

此が研究をなすに當り材料の採集患者につきての諸報告及研究指導につき多大の助力を與へられし飯島博士青山博士及碓井學士に對し玆に深厚なる謝意を表す。

圖版說明

第一圖　蟲嚢及蟲體諸種　自然大

第二圖　患者の背部より得たる筋肉片、蟲嚢及蟲體を具ふ　自然大

第三圖　蟲嚢及蟲體數種　自然大

第四圖　營養物質體　四百倍

第五圖　蟲嚢の切面　嚢中にあるは蟲體の斷面にて其内にある黑斑は營養物質體也　三百倍

●日本產口脚類(承前)

福田卓

(明治四十二年一月二十八日受領)

GONODACTYLUS SPINOSOCARINATUS n.sp. (第五版第二圖、雌四倍廓大、第二圖a最後の二體節八倍廓大)

吻は幅弘くして其中央の棘は鋭けれども先端眼柄の半に達せず前側方の棘も亦先端鋭し。

甲殼は弱く穹窿狀を呈し其長さは全長の五分の一、前緣の幅は長さの三分の二、後緣の幅は前緣の幅より僅かに

NII-Electronic Library Service